中国のむかしばなし

『丁ばあさんと「年」』

近藤　伊津子・編

中国の人々はお正月に爆竹を鳴らし、門には赤い紙を貼り、赤い服を着ました。たくさんの餃子を作りごちそうにしました。

それにはこんなはなしがあります。

むかしむかし、ある村に丁というばあさんがいました。

いよいよ明日、お正月という大晦日のことです。

村の衆はひとり残らず、この丁ばあさんの外は、山の上へと逃げてしまいました。

丁ばあさんだけ残った村に、ひょっこりと見すぼらしい老人がやってきて、喰いものを恵んでくれるよう乞いました。食べ残しの餃子をよろこんで食べて、だれ一人として村にいないのはなぜかとたずね

ました。

丁ばあさんは、実は……と、そのわけをはなしました。

それは、こういうはなしです。

「年」という世にもおそろしい緑色の鱗におおわれた怪物が、もうすぐにこの村にやってくること。そして、人間を腹一杯喰い殺してしまうこと。あたりは潮が満ち、洪水になってしまうこと。

この「年」は、一年のうち三百六十五日は深い海の底に住みついており、その年の終りの日に、海から出て来て、満腹になるまで、人を喰い、お正月の朝、海に帰っていくこと。

そして、去年、丁ばあさんの一人息子が、「年」に喰われてしまったので、今年は、仇打ちをどうしてもしなくてはと、居残った、と、はなしました。

わけを聞いた老人は、

「よし、その怪物を退治してやろう」と云い、丁ばあさんに、赤い紙と布を用意させると、あとは、餃子の餡をたくさん作るようさしずしました。

老人は、門の上に赤い紙を貼り、腰に赤い布をゆわえ、自分の竹の杖を火にくべました。

竹の杖はいきおいよくはじけ、

「ピピパパピー」と、燃えあがり、丁ばあさんの餃子の餡を刻む音が、

「トットットットッ……」と村中にひびきわたった丁度その時、「年」があらわれました。

「ピピパパピー」

「トットットットッ……」

と、けたたましく鳴りひびく村にやってきた「年」は、門の赤い紙と、老人の腰の赤い布がまぶしくて、目を開けておれなくなりました。その上、

「ピピパパピー」

「トットットットッ……」

「ピピパパピー」
「トットットットッ……」
と、絶えまない音に「年」はおどろき、あわてふためき、深い海の底に逃げてしまいました。

翌日、元日の朝、もどってきた村の衆は、丁ばあさんが生きているのを見て、びっくりしてしまいました。

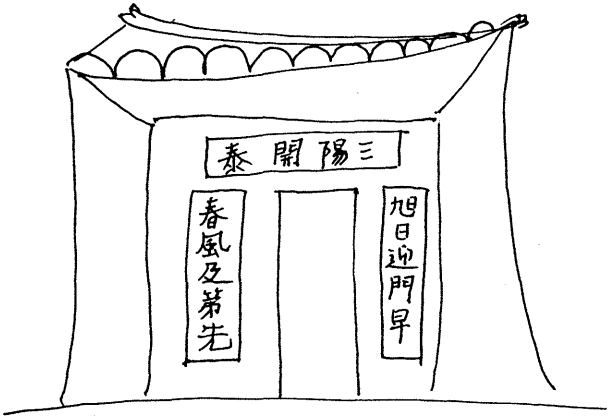
丁ばあさんはわけをはなしました。

それからというもの、人々はお正月になると、餃子を作り、赤い紙を門に貼り、赤い服を着ていると、「年」という怪物が出てきても、人も喰わずに逃げてしまうと信じるようになりました。

おしまい

（かっこう文庫主宰）

むかし……赤い紙と赤い服
いま　……赤い対朕・赤い聯と新しい服



聯と対朕